

4

哈爾賓占據の経過概要

(参考)

昭和七年二月十五日
陸軍省新聞班

哈爾濱方面出兵概況

一 はしがき

哈市及其附近には丁超、李杜、李振声、馮占海、刑占清、張作舟等の將領の率いる軍隊が旧主張作相と密に連絡して反熙洽を標榜し、吉林新政権に服従し存かつたので、熙洽は其政府の基礎漸く固く麾下軍隊の編成も終るに及ぶ。前述反吉林軍を剿討し吉林省を完全に其の政權下に収めんと決心し、一月上旬より北進を開始した。

二 吉林剿匪軍の北進

吉林剿匪軍は三縱隊となり、重慶を東方に保持し、一月五日乃至七日に敦化、吉林、九台の線を出発し、榆樹附近に於て張作舟軍を五常附近に於て馮占海軍を撃退し、一月二十四日阿城より哈市南郊に亘る線に進出し、二十六日主力を以て哈市入城を企圖した。

入城に先ち哈市を戦禍の巷と爲すことを虞
北哈市にある丁超に對し彼等の軍隊を
賓縣方面に撤退せしむべきことを要求した
が拒絶されたので更に交渉を遂ぐる迄暫く
入城を見合せることになった。

三哈市混乱に陥り我居留民虐殺さる
所不依蘭にゐた第二十四旅長李杜は部下二
營を率ゐる二十六日朝突然傅家甸(哈市の
支那街)に進入し丁超及邢占清の部下各一
団と共に完全に同地を占領し掠奪を開始し
た。

支那所を除く哈市は張景惠の警備隊によ
つて警備せられたが微力にして毫も恃むに足
らず、然も相手は匪賊に等しい無頼漢的素
質を有し何等の統制もない危険なる支那
軍のことであるから「傅家甸襲はる」の報一
度傳はるや市民は戦々怛々として大混乱
に陥つた。

哈市の我居留民は内地人約四千、鮮人約一千五百計、約五千五百である。不直ちに義勇軍を組織し、警備に任じ、傳家甸の居留邦人には即刻避難を命じた。此等避難の途中にある内地人一名、鮮人三名は丁超の爲に虚殺せられ、鮮人婦人数名は拉致された。

四 吉林剿匪軍及吉林軍哈市郊外に兵火を交ふ、我將校銃殺せる

一時哈市入城を見合せた吉林軍は傳家甸の掠奪哈市の混乱を見るや、之を救援せんとして二十七日傳家甸に向ひ前進した所、丁超及李杜の軍隊並張作舟の敗残兵等と衝突し、同地南側にて戦闘を開始するに至つた。此結果吉林軍は無辜の民に危害の及ぶを恐れ、一時攻撃を中止し、後退した。この交戦中、時々哈市附近の情況特に邦人の安否を偵察の爲に派遣せられ、同地上空を飛行せし、我軍の偵察機は反吉林軍に射撃せられ、弾丸

機關部に命中し、哈市南側烟地に不時着
陸した。偵察將校清水砲兵大尉は該機の
警戒中支那軍の未襲を受け、無慘にも銃
殺され、操縦將校は情況通報の爲哈市特
務機關に赴き奇禍を蒙られた。

(右飛行機搭載の機関銃並清水大尉の血染の
手帳は我軍哈市占領後丁超の居室から発見
見られた)

五、反吉林軍益々狂暴暴行の限りを盡し

且抗日的となる。各団体日本軍出動請願
茲に於て哈市の我官憲は張景惠及馬占山
(馬は反吉林軍及吉林軍の調停の爲二十七日海
倫から哈市に来た)に対し、我居留民及
偵察將校の虐殺された実情を説明し、其責
任は丁超、李杜及張作舟軍存ることを通告
し、東に處置を講じなければ重大なる結果
を生ずべしと附言した。函人は直ちに處置す
べしと聲明した。

然るに二十七日夜邦人経営の大北新聞社
は支那軍の爲破壊掠奪せられ別に支那
人側の被害も益々増加し人心極度に不安
に陥つた。二十八日に至り哈市の商務会及各
団体(河北も支那人なるは注意を要す)は聯
合して日本軍の出動を請願するに至つた。

六、關東軍一部派兵、東支鉄道使用問題

關東軍は哈市邦人の危急を救ふため二十八日
朝長春より長谷部少將の指揮する歩
兵約二大隊を基幹とする一部隊を派遣
せんとするや東支鉄道係員は河北も逃
走し軍用列車の運轉不能となつた。

同部隊は各種の應急手段を講じて同日
夕迄に辛ふして三列車を編成北上した。亦
及吉林軍の第二十二旅の一部は我軍の北
上を阻止せんとし二十八日第二松花江鉄橋
を破壊したのち急を修理し二十九日亦を強
行通過し北進を續行した。

又吉林軍対日戦意現華國 我軍カレ

対し相当の準備を爲す

又吉林軍は自衛軍と改稱し第二十四旅長李杜を總司令として三十日附我軍に對し宣戰を布告した。

其通電の要旨は曰く「日本軍は亂を助け東支南線を奪取し従業員を虐殺し我國民を輕蔑す依つて吾人は自衛の爲協力一致日本軍に抵抗す 成敗利鈍は予め期する處でない 同胞夫れ援助せよ」と

かくて各地より續々兵力を集合し其の數一万余に達し哈市南側地區に堅固に防禦陣地を構築した。

右の情況をみたから側東軍は寡少の兵力を以て遠く哈市に前進するの危険を有すと思ひ多門師団の主力を長谷部旅団に増加せしむるに決し長谷部旅団には双城附近を占領し後續部隊を來着を待たしめた。

尚情況の變化に應ずる爲山奉線上打虎
山附近にありたる村井旅団を長春に集結し待
機せしめ又齊々哈爾にありたる鈴木旅団の一
部を同地から東支西部線により哈市に進
撃多門師団に協力せしめたる(少くは滿鉄沿
線に在りたる一部隊を洮昂線により鈴木旅団に増
加す)

八支吉林軍双城堡附近長谷部旅団
を襲ふ我軍勇戦少を撃退す

三十日未明支吉林軍の第三十二旅約二千砲
若干は双城堡にあり我長谷部旅団に襲来
したる旅団の將兵は奮戦少を撃退した
我損害戦死十三名負傷三十五名あり
敵の一聯隊は殆んど全滅し其他は蒼惶算を
亂して同日夕哈市に逃入した。

関東軍は三十日夕下起李杜、李振声等少
支吉林軍將領に對し支吉林軍の挑戦を難
詰し速かに下野して誠意を示すべし然らざ
ず

此は及吉林軍一切を我に敵対するものと認め
膺懲すへき旨の最後の通告を發したる彼
等は断然之を拒絶し一戰敢て辭せずと豪
語した。

九、及吉林軍の交通妨害瀕々、東支
鐵道側我軍の要求を容る

蘇国は東支鐵道使用に關し日本軍の輸
送を妨害せぬ旨を聲明したるが、我軍も亦東
支鐵道の權益を侵さぬ旨を聲明し且今次の
出兵は哈市居留民保護を目的とし他意
なき旨を通告したるが東支鐵道當局は三十日
に及り我要求を容認し列車を哈市より双
城に送つたが及吉林軍も双城北方約二十料の
地点を破壊したるが立往生を余儀なくされ
其他双城長春間は絶えず及吉林軍及兵
匪の爲破壊せらるるが第二師団の輸送は遲
々として進まず二月一日以來は自動車は長春
に集め輸送力の不足を補ふなど多大の困難

を冒しつつ北上した。

尚及吉林軍は脊々哈爾方面より我軍の進撃することを知り北東支西部線の破壊列車の抑留をなし且三日哈市より安達に向ひ装甲車二砲一兵約一千名を送つて哈市陣地の側背を掩護せしめんと企圖した。

十、當時に於ける哈市の状況：

張學良は二月一日丁超及馬占山に哈市の固守を命じ且莫德惠をして蘇邦を動かし依然北滿の一角を失はざらむと勉め一方賓縣政府は哈市に吉林治安委員会を設け立し丁超を委員長として軍事、行政、外交、財政等の凡そを其統轄に歸せしめ内部の結束を固め我に當らんとの決意を示した。

哈市居留民は總領事の指示により二月十八日以來数ヶ所に集合避難し我義勇軍を以て警戒してゐる。

特に傳家旬在住の鮮人千五百余名は
埠頭區の小學校に收容した。

其、多門師団 哈市へ進撃

多門師団は二日迄に歩兵五大隊騎兵一中隊
野砲兵三中隊 工兵一中隊 戦車若干を予
定の如く集結し得たるに依り三日朝より
進撃を開始し廂黃旗三屯(双城東北約十
二料)附近にありたる約二百の敵を撃破し更
に廂黃旗五屯(双城東北約二十料)に據れる約
一千の敵を攻撃し之に多大の損害を与へ
て午後七時頃概して廂紅黃三屯附近に進
出した四日更に同線出奔薛家屯、柳馬
架、永奔屯の線(哈市南方約四料の線)に
向ふ前進し午後三時三十分頃より主力を以
て自家窩棚附近の敵陣地の中央に向ふ部
を以て顧郷屯附近敵陣地の右翼に向ふ攻
撃を開始し敵陣地に迫迫して夜に入つた
同日夜師団の一部は横川、紳雨志士の墓附

近の及吉林軍第一線陣地の一部を奪取した
左か敵は市街の一部及圍壁を利用して堅
固に守備し抵抗を持續した。

五日朝より第一線部隊は攻勢を續行し午
前九時頃敵前四五百米に近接した

敵は午前八時頃より逐次退却を開始した
が第一線部隊は午前十時頃迄抗戦を續行
した

^{第一線は}正午頃敵陣地を奪取し次々敗残
兵を掃蕩し午後三時頃完全に哈市を占領
した。

本戦闘に於ける我死傷者は戦死者士官以
下三十名負傷將校以下六十五名である。

及吉林軍主力は依蘭(三姓)方面に潰
走中であつて我飛行隊は二月五日以来索め
て追撃中である。

吉林軍の一部は阿城方面より追撃を
起せしもの如くである。

多門師団は暫く哈市に在りて治安の

維持に任じてある

馬占山は黒吉省境を警備し及吉林
軍の滲入を防止し適時我軍を協力する
旨を通告して来たる。

上海派兵ニ関スル件

二月十四日 陸軍省發表

晝夜ニ上海方面ノ事態急迫スルニ至ル
ヤ不取敢第十二師團ヨリ混成約一旅
團ヲ同方面ニ急派スルト共ニ續テ第
五 九師團ヲ基幹トスル部隊ヲ同方面ニ
派遣セラレタルカ同部隊ハ二月十四
日ヨリ上陸ヲ開始セリ